

短期大学における日本語ライティング教育の役割

The Role of Japanese Writing Education in Junior Colleges

畑 由美子

1 はじめに

本稿は、短期大学のライティング教育の役割について、学生の文章表現に対する意識のアンケート調査から考察を行う。ライティング教育に該当する科目は、四年制大学においては、初年次教育の一環として取り入れられることが多い。実際に、国公私立大学 782 大学中（短期大学、平成 30 年度に学生の募集を停止した大学を除く）91.8%にあたる 679 大学が初年次教育の具体的な取り組みの一つとして、レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラムを実施している（文部科学省 2020）。一方、ライティング教育には、初年次教育としてだけでなく、専門教育への接続や社会への接続を果たす役割もある。学生時代のレポート学習と仕事での経験学習との関係について、小山（2022）は「大学時代に試行錯誤しながらレポートに取り組んだ経験が職場における内省を伴う仕事ぶりに一定程度転移」と述べている。

こうした四年制大学での実践を対象としたライティング教育に関する研究・報告は多くみられるが、短期大学においては初年次教育の実践はいくつかみられるものの¹、ライティング教育そのものの実践報告は多くない。現在の短期大学では、多様な学生が入学する一方、卒業後の希望進路も企業就

1 短期大学における初年次教育の研究については、阿部他（2012）で報告されるスタディスキル全般を扱った「基礎演習」の実践や、松崎（2014）が短期大学 6 校に対して行った初年次教育の実態についてのインタビュー調査などがあげられる。

職はもちろん、四年制大学や専門学校への編入学・進学など、多岐にわたっている。そのため、短期大学におけるライティング教育では、高大接続としての役割はもちろんのこと、「初年次から専門教育」への接続と、「大学から社会」への接続となる力を、短期間で身に付けることの必要性が考えられる。また、中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ（2014）は、①少人数教育、②導入教育、③担任制度、④一貫指導の4点を短期大学の指導の特色として挙げ、さらに、教養教育と専門教育のバランスのとれた教育課程の中での人材養成機能を担うことが、短期大学の役割の一つであると述べている。また、文部科学省（2023）では「大学と比較して、全体として、短期大学の教育活動、短期大学での学びに対する肯定的な回答の割合が高い傾向」にあることが指摘されている。そこで本研究では、学生の文章表現に対する意識や実態について調査・分析を行い、短期大学生に対する高大社接続を意識した段階的・継続的なライティング教育について検討していく。

2 アンケート調査概要

2.1 調査実施校におけるライティング教育の現状

アンケート調査実施校である創価女子短期大学では、1年次春学期から2年次秋学期まで、継続的かつ段階的にライティングスキルを身に付けることができる科目が設定されている（図1）。まず、1年生の春学期の必修科目に初年次教育としてとして、アカデミックスキル全般を学ぶ「基礎ゼミナール」²が設置されている。その後は選択科目として、1年生秋学期の「文章表現入門」、2年生の春・秋学期に開講する「アカデミックライティングⅠ」「アカデミックライティングⅡ」というように、各学期にライティング科目が置かれている。1年次でレポート作成の基本的なルールを学んだ後、2年次では「読解力」や「問いを立てる力」の育成を行うなど、レポート作成を通して段階的に力を身に付けられるよう設計されている。

また、各授業の目的や到達目標に合わせて、レポートのテーマや提出の条件を定めてある。テーマの詳細を図2に示す。

² 初年次の必修科目である「基礎ゼミナール」では、学生生活の過ごし方やプレゼンテーション、グループディスカッション等、ライティング以外のアカデミックスキルを全般に学ぶ。

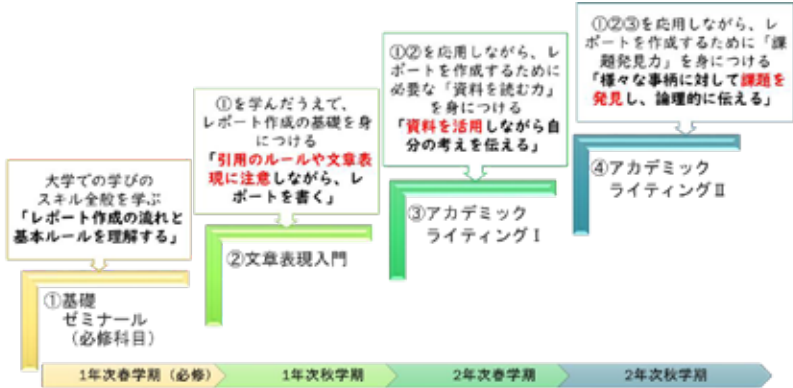


図1 調査実践校(創価女子短期大学)におけるライティング教育に関する授業の関連性

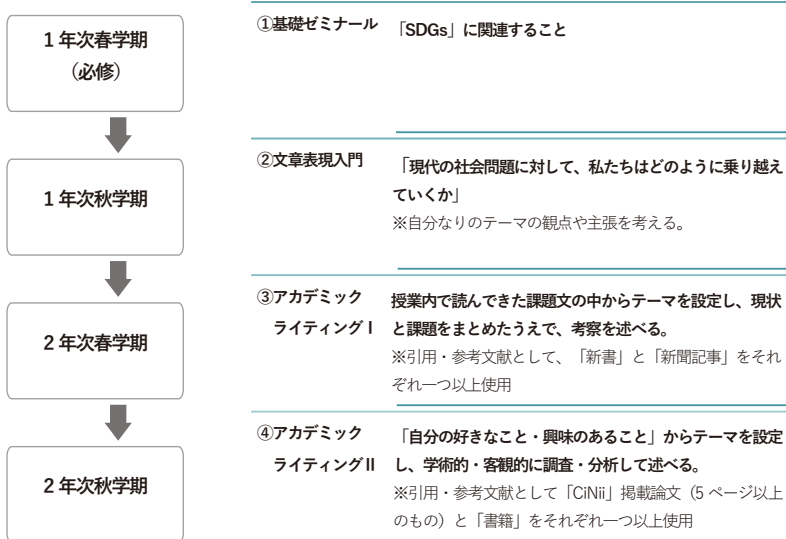


図2 調査実践校(創価女子短期大学)におけるライティング教育各授業でのレポートテーマ

2.2 調査方法・対象

調査に当たっては、選択科目である「文章表現入門」「アカデミックライティングⅠ」「アカデミックライティングⅡ」を履修する学生に対し、2回目と15回目（最終回）の授業後に、書くことに対する意識調査のアンケートを実施した。分析には、アンケートの回答者計100名の中から研究協力者を募り、承諾された回答32名分を対象とする。

ここでは、2年間の授業を通して、学生のライティングに対する意識がどのように変化したかという点について着目するため、1年次9月の「文章表現入門」で実施し承諾を得た20名分の調査結果と、2年次1月の「アカデミックライティングⅡ」の授業で実施し承諾を得た20名分の調査結果をもとに考察をしていく。なお、そのうち、「文章表現入門」と「アカデミックライティングⅡ」の両方の授業を履修した学生は12名であった。また、調査を承諾した32名のうち、「アカデミックライティングⅠ」を含むすべての授業を履修した学生は7名となっている。また、アンケート調査では書くことに対する意識の他に、読書や日常生活での書くことへの習慣や、授業への期待についても記入してもらった。「書くことに対する意識」「レポート執筆に関する苦手意識」「授業に対する自由記述欄」を取り上げる。

表1 アンケート調査協力の対象者について

調査対象者	人数(人)
アンケート調査 全協力者数	32
1年次9月実施分 アンケート調査協力者数	20
2年次1月実施分 アンケート調査協力者数	20
(協力者のうち)文章表現入門およびAWⅡ履修者数	12
(協力者のうち)全ライティング科目履修者数	7
ライティング科目履修者の総数	100

3 結果と考察

3.1 「書くこと」に対する苦手意識の変化

まず、書くことに対する苦手意識の有無について述べる。

図3、図4はレポートに限らず「文章を書く」ということそのものの意識について、それぞれ1年次の9月と2年次の1月に調査した結果を示したものである。1年次9月の調査では、「非常に得意」と「まあまあ得意」が合わせて37%であったのに対し、2年次の1月の段階では「非常に得意」は0%だが、「まあまあ得意」が42%と、得意に位置する学生が微増している。数値としてはいずれも「得意」という意識は4割程度、「やや苦手」「非常に苦手」が6割程度のみであるが、苦手意識を覚える理由について変化が見られた。

表2は上記の書くことの意識に対して、なぜそのように考えるか、理由を記述したものである。苦手意識の変化を見るため、文章表現入門およびアカデミックライティングⅡの両方の履修者12名中「やや苦手」「非常に苦手」

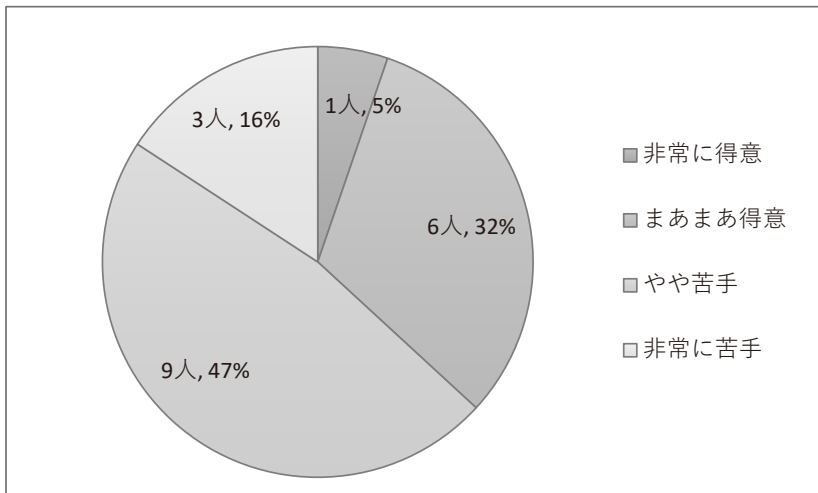


図3 質問項目「あなたは『文章を書く』ということについて、どのような意識を持っていますか」の回答結果（2021年度（1年次）9月実施）

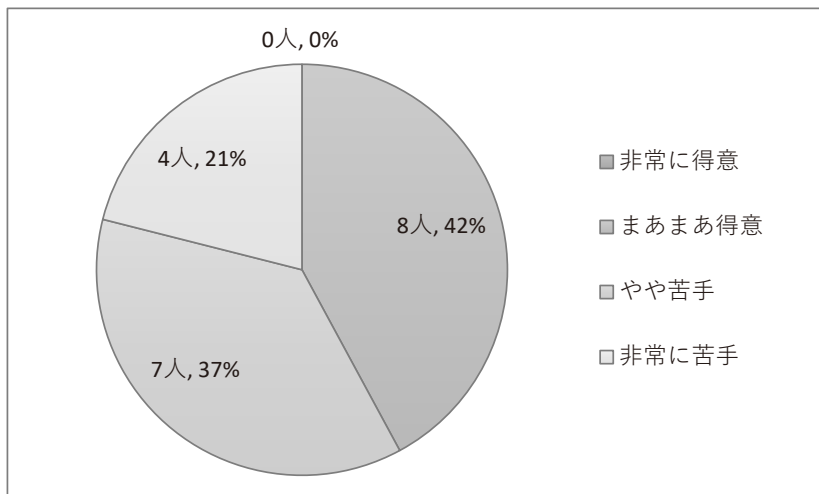


図4 質問項目「あなたは『文章を書く』ということについて、どのような意識を持っていますか」の回答結果（2022年度（2年次）1月実施）

と回答した7名分に注目する。1年次9月には、他者に対して伝わらなかった経験や、敬語や漢字といった語句に対しての苦手意識が窺える。一方、2年次1月には同じように苦手意識を持ってはいても、「自分の考えを言葉にする」といった内容や「書くのに時間がかかる」といった回答が増えている。1年次に感じているような他者からの指摘や語彙力への課題意識だけでなく、2年次になり精神的な成長や思考力が鍛えられたことにより、「考える力」に関する苦手意識に気付いた結果だと考えられる。

3.2 「レポート」執筆に関する苦手意識

前述のとおり、書くこと全般に対して、学年が上がるにつれ苦手意識に変化が見られた。ここではさらに、レポート執筆に関する意識の変化について述べる。書くことやレポートに対して苦手意識があるといっても、その理由は学生ごとに異なる。また、どの段階で苦手意識を感じ、課題を抱えるかということの把握は、適切なライティング指導を行う上でも重要である。

表2 質問項目「そのように（得意または苦手）感じるのはなぜですか」の回答比較（抜粋）

2021年度（1年次） 9月時点		2022年度（2年次） 1月時点		
1	非常に苦手	今まで相手に説明しても理解されることがあまりなく話すことも苦手だからです。	やや苦手	自分の考えを言葉にすることが難しいと感じるため
2	やや苦手	意見をまとめることが苦手なため	やや苦手	語彙力や文章力が低く、簡潔に読者に伝えたいことを伝えることが出来ないと感じるため。
3	やや苦手	敬語などがあまり分からないから。	やや苦手	<u>書き出すのに時間がかかる</u> から。
4	非常に苦手	受験の時に小論文で苦戦したから。	非常に苦手	高校で小論文に挑戦した時何も書けず、これまでもあまり文章を書いてこなかったから。
5	やや苦手	相手に伝わるように自分の意見や思いを文章にすることに毎回苦戦するから。	やや苦手	<u>読み手に自分の考えを正確に伝えられるような文章を書くことができない</u> 、または <u>時間がかかってしまう</u> ため。
6	非常に苦手	本を読まないからです	非常に苦手	<u>レポートを書くのに時間がかかる</u> から。
7	やや苦手	小さい頃から漢字が覚えられなかったり、話をまとめるのが苦手なため	やや苦手	小中高と「書くのが下手。」等の指摘が多かったことから、苦手意識を持っている。また、作文等の成績が悪かったことから、やや苦手と感じる。

レポート作成のどの段階で難しさを感じるか、1年次と2年次で比較したものを図5に示す。1年次9月の結果では、「レポートの構成」へ苦手意識を持つという回答が最も多く、次いで「客観的に書く」「言葉遣い・文章表現」「テーマ設定」に苦手意識を持つ傾向が見られた。それに対し、2年次

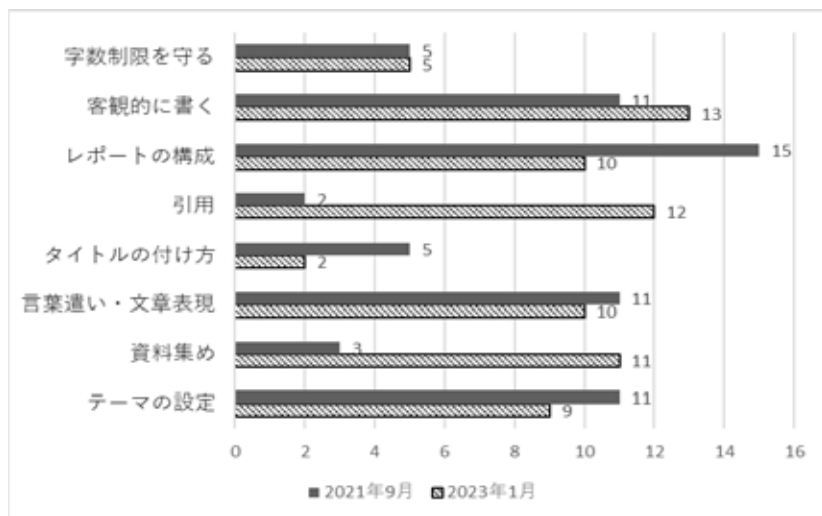


図5 質問項目「あなたはレポート作成の際、どのようなところで難しさを感じますか。(複数回答可)」の回答比較(2021年度(1年次)9月・2022年度(2年次)1月の比較)

1月の結果では、「客観的に書く」が最も多く、「引用」「資料集め」が上位になった。

引用や資料集めの重要性は「基礎ゼミナール」においても指導されているが、上記の結果は1年次よりも2年次の方が難しく感じるということを示していることになる。これは、1年次の段階では、「引用」「資料探し」の重要性を特に意識することがなく、困難さを感じにくいのが、2年次になり、様々な課題と向き合う中で、「引用」や「資料(客観的根拠)」の重要性を理解できるようになったのではないかと考えられる。重要性を理解したことで、「できていなかったこと」に意識が向いたのではないだろうか。

3.3 授業に対する自由記述欄

また、自由記述欄(2年次1月実施分)からは、「苦手意識の克服」と「他者意識」についての意見が見られた。以下に、いくつかの例を示す。

《苦手意識の克服》

- テーマ設定や書き言葉などの文章を書くために必要な知識を身に付けるだけでなく、この授業を通し私は苦手なことと向き合い、挑戦することができました。
- 文章表現にかかわる授業を通し、文章を書く苦手意識が減少した。私は、小中の作文が苦手だったことや高校生の時は小論文の授業を選択していたが、直しが多く書くことに苦手意識を持ち、書き方がわからなくなっていた。しかし、文章表現にかかわる授業を履修したことで、苦手意識が減少したとともに、レポートを書く際に何が正しいのか迷うことが減少した。

上記から、ライティング教育を通して苦手なことと向き合い、挑戦、克服したという実感が学生の中にあることがわかる。このことは先述した、小山（2022）の指摘する「大学時代に試行錯誤しながらレポートに取り組んだ経験」に当てはまるといえよう。卒業を控え、社会に出る直前の時期である2年次の1月にこうした手ごたえを得られることは、短期大学でのライティングの学びが、「大学から社会」への接続となる力に結びつくことが期待できる。

《他者意識の変化と文章構成》

- 構成を考えながら文章をつくる力が着いたと思います。社会に出てからも発言する際に構成を考えて相手に伝わるよう意識して過ごしていきたいです。
- 結論を先に述べる大切さがわかるようになりました。友達と話す時も、結論から話して分かりやすくしようと心がけています。

これらは主に、他者に対する「伝わりやすさ」の中でも「構成」を意識したものである。ライティングスキルの重要性を理解し、日常の中でも実践する姿勢が見られる。

《他者意識の変化と客観性》

- 今までは作文のような自分の気持ちを書くだけだったのですが、この授業をとってから根拠があるとより説得力が増すことや、正しい文章の表現の仕方を身につけることができたと思う。また日常生活では、文章構成を意識して相手に伝えるように意識したり、説明をする時にもわかりやすく説明をするためには根拠や、元となる情報をなるべく伝えるようにできるようになった。
- 文章を客観的に書くことができるようになったと思う。自分の感情が表に出過ぎないように、事細かに確認する癖が付けられた。

ここからは、自分自身と客観的に向き合い、メタ認知による「伝わりやすさ」を意識できるようになっていることが窺える。

井下（2022）では、書くことを通したメタ認知について、以下の様に述べている。

書くことを通して思考を可視化し、自分の書きたいことや伝えたいことは何かを省察し調整（メタ認知）することで、自己の在り方生き方を探究することができる。広くディシプリンに学び、文献を読み込み、他者と対話を重ね、現実を深く探究して、批判的に検討し、問いを温め、粘り強く考え抜いて書く力を鍛えるプロセスには、教養を深め、人間として成長する醍醐味がある。

このことから、ライティング教育はいわゆる「レポートを上手に書くため」の教育ではなく、むしろ、レポート執筆という書くプロセスを通して様々な情報や社会はもちろん、自分自身とも向き合い、人間的な成長につながっているものであるといえる。

4 おわりに

以上、短期大学生の書くことへの意識調査から、ライティング教育の役割について考察してきた。調査結果からは、「書くこと」が苦手と感じる割合は、1年次と2年次では大きな差はないものの、そのように感じる理由において、1年次よりも2年次の方が「考える力」の難しさに気付く傾向が見られた。また、レポート執筆においては、1年次では「レポートの構成」に課題意識があったのに対し、2年次の方が引用や根拠を示す重要性を意識し、客観的に説得力のある文章を書くことに課題意識が向く傾向がみられた。これは他者を説得するための客観的根拠の必要性や、それらの扱いの難しさを理解するようになったことが要因としてあげられる。また、自由記述欄からは、「他者への伝わりやすさ」を意識した変化が見られた。このことから、ライティング教育の実践を通して客観的・多角的に考える力が身に付き「異なる考えを持った『他者』」の存在を、より一層意識するようになったと考えられる。ライティングスキルの習得だけでなく、こうした学生の意識変化は、人間的な成長にもつながり、多様な人材で構成されるこれからの社会において、不可欠な力であるといえよう。

また、こうした意識は、段階的・継続的なライティング教育の中で、「自分自身」や広い意味での「他者」と向き合う時間も確保されることで、学生自身の内面の成長にもつながる。このような学生の成長は、2年間という短い期間と少人数教育の短期大学だからこそ、より効果が期待できるだろう。このことから短期大学でのライティング教育は、レポートを書くスキルの育成だけでなく、自分自身と向き合うことで「苦手意識の克服」や「他者意識の育成」をも担っているといえる。変化の多い社会において、学生の成長を促す段階的・継続的なライティング教育の在り方を、今後も多角的に検討していきたい。

引用・参考文献

- 阿部敬信・山村靖彦・高濱正文（2012）「短期大学における初年次教育の実践―初等教育科「基礎演習」の実践をとおして―」『別府大学短期大学部紀要』31 pp.35-44
- 井下千衣子（2022）「思考を鍛えるライティング教育とは―変革期を生きる人間形成

の基本となる、教養ある『自律した書き手』の育成―』井下千以子編著『思考を鍛えるライティング教育―書く・読む・対話する・探究する力を育む―』pp.1-12 慶應義塾大学出版

小山治 (2022)「高校・大学・仕事におけるレポートライティング経験の職場における経験学習に対する連鎖構造―社会科学分野と工学分野を比較した学び習慣仮説の精密化―」井下千以子編著『思考を鍛えるライティング教育―書く・読む・対話する・探究する力を育む―』pp.173-194 慶應義塾大学出版

中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ (2014).「短期大学の今後の在り方について―審議まとめ―」文部科学省 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/09/19/1351965_1.pdf (2023年8月参照)

松崎陽子 (2014)「短期大学における初年次教育の現状と課題」星稜女子短期大学編『星稜論苑』43号 pp.41-48

文部科学省 (2020)「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf (2023年9月参照)

文部科学省 (2023)「令和4年度「全国学生調査(第3回試行実施)」の結果について(報道発表)」https://www.mext.go.jp/content/20230712-koutou02-000001987_1.pdf (2023年9月参照)